

原 著

## 構成主義、東洋思想、そして人間科学 — 知の縦列性から知の並列性へ —

菅 村 玄 二

### 要 旨

構成主義、東洋思想、および人間科学の3者の関係を考えることを通して、新たな人間科学のメタ理論の可能性に迫ることを試みた。まず、一般に理論構築に用いられる建築の隠喩の無根拠性と非機能性を説き、代わりにインターネットの隠喩を使って「連立制御ネットワーク」としての人間科学を提起した。つぎに、構成主義の発想法、二分法コード、および自己言及性のもつメタ理論への示唆を考察した。そして、これらについて、道教と禅仏教の観点から類似性を示し、それを進化論的認識論とパーソナル・コンストラクト理論から再吟味した。これらの議論から、人間科学は諸理論をむすび、つなぐプロセスに動的アイデンティティを見出すこと、また一面的な主義・主張に陥らず、究極的には人間科学と非人間科学との絶対矛盾的自己同一もまた思索の価値があることが主張された。

キーワード：メタ理論、メタファー、二分法コード、太極図、自己言及性

「文字に囚われてはならぬ。その精神を掴むのだ」(Suzuki, 1934/1964, p. 72 増原訳、1991、p. 78)

### 理論構築のメタファー

#### 建築のメタファー

ある土地に、家を建てようと思いついたとする。一生住むことになる我が家である。当然、しっかりとした家を建てたい。家の材料や造り、特にその家を支える柱には注意が必要である。しかし、家を支える柱、骨格よりも重要なものがある。それは、土台の堅強さである。家を建てるからといって、その家そのもののみ注意を払っていたら、たとえ、その家が頑丈で立派な作りであったとしても、土地が軟弱であれば、どんな堅固な家でもたちまち倒れてしまう。だ

からこそ、家を建てるときには、まずその土台を強固なものにすることが第一条件となる。何をするにしても、まずそこから始めなければならない。

ある学問を立ち上げようとしたとする。ここでは人間科学がそれである。たしかに、これを脆弱な枠組みにしないためには、どのような学問を人間科学の「柱」とし、それをどのように「組み立てる」かが肝要であり、実際にこれまでも、これについての議論がされてきた(浅井ら、1998; 濱口、1988; 春木、1988; 佐古ら、1998)。だが、最初に始めなければならないのは、「家」に関する議論ではなく、「土台」を固めることである。これを疎かにしたまま、1つの学問を樹立しようとするのは、土地の吟味を行わないまま、そこに高層ビルを建てようとするようなものである。

では、人間科学の土台とはなにか。この問題については、日本ではほとんど議論されてきておらず、むしろ欧米を中心に論じられてきた。たとえば、Giorgi (1970) は、Husserlの超越論的現象学を背景に、自然科学たろうとする心理学を徹底的に批判して、代替的な科学としての人間科学を提起し、彼の現象学的心理学をそれに位置づけ、間主観的な知の創出の重要性と説いている。同じく現象学を背景とし、Strasser (1962/1978) は、人間の主体性の把握に失敗している客観主義的科学を批判しながらも、経験科学的な知を共有できない主観主義的な系譜も十分でないと考え、「第3の道」として現象学を基盤とした人間についての経験科学を提唱している。

このような「第3の道」の模索は、ここ10年ほどのあいだに、さまざまな形でアメリカを中心にポストモダンの行き過ぎた側面に対する反省からも生じているが、Strasser (1962/1978) はこれを40年以上も前におこなっている点で、きわめて先見性にすぐれていたと言えよう。人間科学論争に限局していえば、最近、菅村・春木 (2001) がメタ的な視点からこの問題を論じている。そこでは、Strasser (1962/1978) が採用したようなHegel弁証法は直接的には仮定されていないが、図式としては、モダニズムに対する反定立としてのポストモダニズムという2つのメタ理論と、それらのアウフヘーベンとしての「超メタ理論」という仮説構成概念が想定されている。これを受けた西條 (2002) は、池田 (1990) の構造主義科学論に、この「超メタ理論」の可能性を見出し、コギト論証における「私」、経験としての「現象」、言葉の同一性としての「観念」を出発点とした人間科学を説いている。

### 建築の隠喩の無根拠性

人間科学の「土台」についての議論は、今日このような展開を見ている。家屋を建てる前に土台を固める。学問を構築するにあたってその

基盤を整備する。このような発想は、人間科学を考えるうえで重大な問題であり、これが哲学的にも厳戒を要する問題であることは間違いがない。しかしながら、人間科学とはなにか、理論とはいかなるものか、また学問とはいかにあるべきか、ということをよくよく沈思したとき、ふと思うのである。そもそも、人間科学に「土台」は必要なのか、学問にとってその基盤とは、果たして不可欠のものなのだろうか、と。

建築のメタファーを理論構築に適用した場合、その含意は次のようなものになるだろう。①理論にはその要となる「柱」が必要となる、②理論構築に先行し、論理展開の基盤となる「土台」が必然的に求められる、③理論は基本的に垂直方向に組み立てられる。

しかし、建築の隠喩がそのまま理論の構築に当てはまる保証はない。理論構築にあたって、建築のメタファーを用いなければならないという決定的な理論的根拠が果たしてあるのだろうか。同じ"construct" (建築、構築) という言葉から、類比推理、あるいは没反省的に仮定してしまっているだけではないのか。

メタファーは、使い方によっては読み手の理解を大いに促進し、当該の意味を越える示唆を与えることがあることも言うまでもない。しかし、そのメタファーがあらぬ含意をもっているとすれば、それを使うのは適切ではない。さらに問題なのは、それがメタファーであるということすら自覚せずに、字面だけに囚われてその潜在的な可能性を狭めてしまうことである。囚われれば自由を失う。あるメタファーに固執しなければ、別の可能性が見えてくるかもしれない。上述した3つの含意に見られるように、それによって制約される側面もあるのであれば、意図的であれ無意図的であれ、建築の隠喩に執着する理由はないのである。

### 構成主義における理論の構成

建築のメタファーに拘泥しないとすれば、どのような理論化が考えられるのか。その問題に

取り組むにあたって、ここでは構成主義の理論のあり方を参考にしたいが、残念ながら構成主義は日本では馴染みのある思想ではない。そのため、構成主義の主張内容を簡単に見ておく必要があると思われる。ただし、本論文は、構成主義の解説をするのではなく、その理論の「あり方」から人間科学を考えることを主眼としているため、その基本テーマを概観するにとどめたい。

### 構成主義の基本主題

Mahoney and Moes (1997) によると、構成主義では、①能動性、②秩序形成、③社会象徴的プロセス、④ダイナミック・アイデンティティ、⑤自己組織的発達、という5つがとりわけ重要であり、相互依存的なテーマになっている。

構成主義では、現実とは、主体の「能動」的な認識と行為をとおして、その円環性のなかで相即的に立ち現れると考える。Kelly (1955) が述べているように、個々人は、独自のやり方で現実を構成し、探索的に生を生きる。ひとは、単に現実を構成するだけでなく、それを維持し、改訂し、洗練させながら、「秩序」づけていくのである。

今日では、多くの物理—化学システム、あらゆる生物、社会、生態、文化システムは、複雑系であるといわれているが (Jantsch, 1980; Kauffman, 1995; Nicolis & Prigogine, 1977)、ひともまた複雑なシステムだと考えられている。特に、ひとは「社会」的動物であり、言語などを使って「象徴」的に他者とコミュニケーションするため、これが複雑性の増大にもつながっている。また、複雑なシステムでは、「自己組織化」という自律的变化が重要な役割を果たしているため、「アイデンティティ」は概して非線形で、「ダイナミック」な「発達」を特徴とする。

要するに、構成主義とは、ひとは他者との関係性のなかで、能動的に自己、および世界を組織化し、秩序づけながら、自己組織的に発達す

る存在であるとする思想体系といえよう。つぎに、これらの基本主題を1つの体系として組織立てる構成主義の理論のあり方を見ていくことにする。

### 身体—脳の関係性：連立制御構造

構成主義が、知識獲得における能動性について言及するとき、身脳問題は避けて通れない。伝統的な認知モデルでも、ひとの脳の能動性を認めるが、それでも連合主義の立場をとるため、刺激—反応の分析が中心となる。ところが、人間の脳が一体どのようにして感覚を知覚や行為に変換するのかということになると、長いあいだ常に問題になってきた。これに対する新たなモデルは、運動理論 (e.g., Weimer, 1977) と呼ばれるものであり、フィードバックだけでなく、前—存在論的なフィードフォワード・メカニズムを想定することなどにより、Kantのア—プリオリな知識という発想の—線を越えるといわれている (Mahoney, 1985)。

構成主義の近代的な系譜の祖といわれる Giambattista Vico は、「真実なるものは、自ら作り上げたものである」という言明で知られるが、これは知識が世界から一方向的に所与されるものではなく、製作行為と相即的に組織化されるものであることを意味している。この知識と製作行為との相互置換性の主張は、知覚と運動の円環的關係を強調する Piaget とも共通するものであり、また「すべての行為は認識であり、すべての認識は行為である」(Maturana & Varela, 1984, 管訳, p. 28) とするオートポイエシスの理論ともつながっている (菅村, 2002b)。

今日の心理生物学や脳科学もこれを支持する立場をとっており、脳と身体との關係を「脱中心的」、あるいは「連立的」と考えるようになってきた (Mahoney, 1991)。つまり、ひとというシステムにあつては、システム全体にアクセスするような「中心」となりうる部分がなく、認識システムと行為システムとは、複雑な1つ

のシステムの統一体であり、ダイナミックな多次元制御をおこなっていると見なされている (Figure 1)。

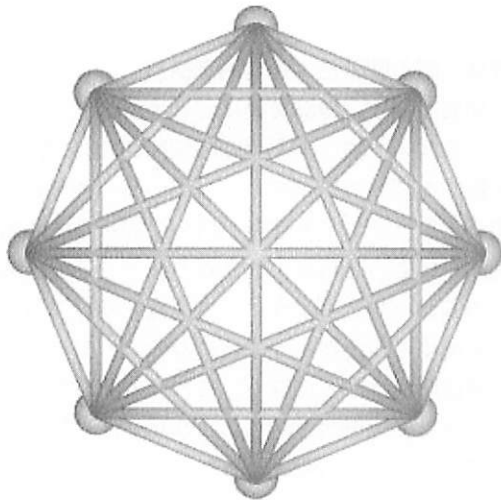


Figure 1 連立制御モデル

この図に表わされているように、これは従来型の中枢を最上位に位置づける "hierarchical control" (階層的で縦列的な制御) ではなく、"heterarchical control" (異質なもの同士の混成的な連携からなる並列的な制御) のモデルである。つまり、構成主義では、身体と脳とは、どちらが中心となるわけでもなく、それぞれが連携的にコントロールを行っているといえるのである。

#### 理論—理論の関係性：連立制御ネットワーク

いま身脳問題を連立制御という観点から概観したが、これは理論と理論との関係についての理論、すなわちメタ理論のレベルまで敷衍できる考え方である。

**並列構造主義** Mahoney (1985) は、このような脱中心型の連立制御モデルを「並列構造主義」(heterarchical structuralism) と称する。ただし、このモデルは構造と同時に機能も表現していることに注意されたい (Mahoney, 1991)。構成主義は、対照性による現実の構成を主張するが、並列構造主義の理解を助けるの

が縦列構造主義 (hierarchical structuralism) とのコントラスト<sup>31</sup>である。縦列構造主義とは、基本的に知識過程にせよ、言語やパーソナリティ、また物理的宇宙でさえ、階層化されていると見なす考え方である。たとえば、一次思考—二次思考、中心的特性—周辺的特性、深層構造—表層構造といった具合である。階層性、あるいは縦列性といった場合、しばしば行き過ぎた線形性や主従関係のような一方向性、また制御における遠心性などを暗に意味しているが、並列性という用語は、知識が脱中心的に移流することや相互依存的なシステム間において絶え間ない連携性による制御が創発することを表現するのに適している (Mahoney, 1985)。

並列構造主義は、主に知識過程について議論する際に有効性を発揮するが、構成主義は、この考えを理論と理論との関係に適用することも可能な枠組みでもある。たとえば、構成主義では、客観主義とは異なり、知識が世界からの一方的な所与とは考えない (菅村・春木, 2001)。そうではなく、行為者が自らの経験を組織化することによって、世界を秩序づけると考える (菅村, 2002b)。そのため、唯一の現実や「正しい」現実なる考えはそこから導出されない。むしろ、存在論的特権のある知識などはなく、ある知識は他の無数の可能性と並立するものとなる (Gergen, 1996) のと同様に、特権的な地位をもつ理論などはなく、ある理論は他の無数の理論と並列する関係にあることになる。

並列構造主義、ないし連立制御構造を諸理論の関係性に応用する際、その含意は以下のようなものであろう。① 理論構築にあたって、「土台」は必ずしも必要でない、② 理論は垂直方向に「組み立てられる」ものではない、③ いかなる理論でも出発点になりうる、④ 理論間に優劣などの上下関係はない、⑤ 理論間には多方向的な影響があり、それらは相補的な関係にある。

**インターネットのメタファー** これらの条件を許容するようなメタ理論があるとすれば、それは「建築」のイメージからは程遠く、喩える

ならば、むしろ「インターネット」の比喩が適しているように思われる。インターネットは、そもそも冷戦時代に、米国防総省が軍事目的で新たな通信システムを考案したことに由来する。従来の通信システムでは、中心的な通信施設が何らかの原因で不通となると、一切の通信が不可能になり、システム全体が機能しなくなるという大きな欠点があった。そこで、複数の中継施設を設け、かりにいくつかの施設が機能停止しても、他の利用可能な中継施設があるかぎり、通信不能に陥らないシステムの開発に着手した。軍事的には、1台の大型コンピュータですべてを集中管理するよりも、複数に分散させて管理するほうが、攻撃された際の被害を最小限に抑えられるのである。このネットワークが発達して、今日のインターネット、World Wide Webになっている。

このような発想は、ある理論や学問を構築しようとするときにも、きわめて有効であろう。たとえば、Descartes (1637/1997) は、「考える我」を哲学の第一原理とし、またHusserlの現象学的還元の着想などもここに由来するが、理論や学問において、このような「土台」、あるいは中心的役割を果たす起点があるということは、たしかにそれを通じた理論的一貫性を保証し、そのうえに知識を「組み立てる」ことに貢献する。しかし、その「土台」が「攻撃」にさらされ、十分に機能しなくなると、その理論を一貫させていた「柱」もまた不安定になり、当該の理論システム全体が麻痺、あるいは膠着する危険性も孕んでいる。

もし、このメタ理論が、インターネットのメタファーに表わされるように、それを構成する諸理論の関係性において脱中心的で、連立的な形態をとっていたならば、かりにいくつかの理論の誤謬が発見され、一部で不具合が生じたとしても、諸理論の多方向的で相補的なネットワークによって、システムとしての機能の低下を最小限に抑えることができ、システム全体で機能不全に陥ることを避けられる。今日の構成

主義は、きわめて広範な分野にまたがり、しかも日々発展する「動的多様性」を備えた理論となっているが(菅村、2002b)、その理論の構成においてもインターネットのような連立制御をおこなう構造を形成し、またそのようなものとして機能しているように思われる。

理論構築にあたって建築のメタファーに則る必然性はないと述べたが、もちろん理論的問題にインターネットのメタファーを適用しなければならぬという決定的な根拠があるわけでもない。ではなぜ、これを持ち出すのかというと、それはやはりその有用性にある。詳細は後述するが、構成主義は客観主義の立場をとらないため、外界との照合によって知識の「妥当性」(validity)を検証するのではなく、その「生存可能性」(viability)という面から評価する。危機管理のために開発されたインターネットが多くの拠点をもちもつほど、その危機回避能力が高まると同様に、構成主義でもさまざまな知識などを兼ね備えるほうが、生存可能性が高まると考えられる。

これは理論と理論の関係にも当てはまることであり、このため、構成主義には、他の思想を排除せずに擁護しようとする性質がある(Mahoney, 1991)。受け入れることを尊び、締め出すことを嫌うといってよい。建築のメタファーに則った理論ももちろんあってよいが、少なくとも生存可能性という点では、インターネットのような理論体系に比べて脆弱になることが懸念される。理論の構成において、インターネットの隠喩、あるいは直喩を使うのは、機能上、建築のそれよりも有益な点が多いと思われるからである。

**連立制御ネットワーク** このような構成主義の特長は、メタ理論としての人間科学に積極的に導入されてよい。つまり、人間科学のメタ理論には土台となる部分はなく、諸理論が相互に連携することによって成り立っており、それらの間に上下関係はなく、それぞれが並列的な関係にあると捉えるのである。こうしたうえで、

理論間、また諸学問間の連携を図り、ある理論の欠点は、他の理論によって補い、またその理論が別の理論によって補強されるという枠組みを作っていくことが望まれる。この発想は、身脳問題を論ずる際の連立制御構造とインターネット概念の示唆が元になっているため、このような形態をもつメタ理論を「連立制御ネットワーク」と呼ぶことにしたい。

連立制御ネットワークとして、人間科学という体系を捉えたとき、インターネットのメタファーにはもう1つ示唆がある。それは「プロトコル」という概念である。プロトコルとは、ネットワーク上で情報を交換するために従わなければならない通信規則であり、国際的な標準がある。インターネットが適切に稼動しているのは、プロトコルの取り決めをしているからだとすれば、人間科学における諸学の連携にもプロトコル様の何かが必要ということになる。つまり、人間科学を連立制御ネットワークとして機能させるためには、ノード間のコミュニケーションの方法についても問題にすることが求められる。

この点に関して、構成主義が実際におこない、かつ有望と思われるのは、春木(1988)のいう「共通項論」である。これは、諸学問や諸現象に共通する事象を抽出し、それによって統一的な理解を図るという立場であり、行為や身体を人間科学を連立制御ネットワークとして捉え、人間理解の基軸としたり、システム論を方法論上の共通項にしたりすることが考えられる(春木、1988、1997a、2002)。構成主義の場合、先にあげたような、能動性、自己組織性、社会象徴性、発達の視点などを人間や世界の理解の基軸とし、それらを「共通項」にしながら、さまざまな学問や理論をむすび、そしてつなぐことを通して発展している。なにより、構成主義でいうところの「構成」(construct)という言葉は、多種多様な分野で重要な用語として使われることが多く、実際、この概念を媒介とした異分野間でのコミュニケーションも活発化している。

もちろん、ノード間で相容れないテーゼを掲

げている場合は、それらの中で対話をおこなうのは実際問題として難しいが、「共通項」があれば少なくともコミュニケーションの契機にはなりうる。共通項は、上述したような比較的幅広い概念である必要はなく、各主題のもつ多くの関連概念であっても対話の促進に貢献できないことはない。連立制御ネットワークは、進化・発展する学のネットワークであり、膨大な数のノードがその内外に存在している。理論も学問も、接続しやすい共通項からネットワークを形成していけばよい。かりにコミュニケーションがまったくとれないノードAとノードBがあったとしても、そのような場合は、ノードCを経由して連携を図ることができる可能性もある。

**科学哲学的位置づけ** このようなモデルは、Thomas Kuhnのパラダイム論とは馴染まない点が多い。Kuhn(1996)は、科学の発展には3段階あると述べている。まず、さまざまな学派が林立し、科学以前の状態とされる「前パラダイム期」があり、次に、ある特定の1つの学派が他に競い勝ち、その考え方が通常科学になる「パラダイム期」、そして、それまでの科学が別のパラダイムに置き換えられる「革命期」が続く。この観点からすると、異なる学派が並存する状況は「科学以前」の未発達な状態であり、そこから脱すること必然的に求められるが、人間科学を連立制御ネットワークとして捉え、多学派・多パラダイム並存がむしろ健全な状態といえる。

多数のノードが並存する状況のなかで、それぞれのノードやプロトコルがその生存可能性によって淘汰されていくと考えれば、これはどちらかというところ、Karl Popperの科学論に近いと見られる。だが、生存可能性概念は、あくまで「可能性」であって、Popper(1963)のように、あらゆる科学理論がより適切な理論に置き換えられていくとは必ずしも考えない。むしろ、連立制御ネットワークモデルは、このようにいわば「知の垂直性図式」に挑戦するものである。

その意味では、科学とは科学者の営為すべてであり、科学者の数だけ科学の考え方や手法があつてよいとするBridgman (1955) の見解や、個々の科学者を主体にしたある種のアナーキズムが科学の発展を促進すると考えるFeyerabend (1975) の科学論に通じるところが多い。連立制御モデルは、各ノードを基点にしたネットワークであるが、個々のノードは、究極的には個々の研究者の考え方に行き着く。

重要なのは、各々のノードは等価であつて、そのような並列ネットワークが人間科学というメタ理論の生存可能性を高めるということであり、知を序列化すべきでないという点である。連立制御ネットワークは、その性質上、自らを正当化することをよしとせず(non-justificational)、基盤をもたず(non-foundational)、また階層化されることを嫌う(non-vertical)。連立制御ネットワークとしての人間科学は、並列化のプロセスのなかに自らの姿を見るのである。

### 構成主義のメタ性

このようなメタ理論として人間科学を再公式化するということは、構成主義の立場から、学際性の1つのあり方を示すということでもある。この意味で、構成主義はそのあり方において、すでにメタ性を孕んでいるといえるが、この思想にはほかにメタ的視点を提供する要点が内在している。

### 発想におけるメタ性

先に近代的な構成主義者といわれるVicoの一節を引いたが、彼は一般にDescartesを徹底的に批判したことで有名である。Descartes (1637) は「われ惟う、故にわれ在り」(cogito, ergo sum) と述べたが、Vico (1710/1988) は、Descartesを指し、「懐疑論者として、自分が思考していることは疑っていない」(上村訳、p. 49) と揶揄し、「自分が思考しているということを意識はしているものの、その思考の原因、あるいは思考がどのようにして作り出されるのかを知

らない」(上村訳、p. 50) と批判している(菅村、2002b)。この批判は、Descartes哲学の「土台」を揺るがすものであるが、Vicoのこの指摘に端的に表わされているように、構成主義は、考えるというまさにそのプロセスを考える学問であるという意味でもメタ的なのである。

これと関連することに、構成主義は一般に現実の構成についての理論であると理解されている。この理解の仕方がどこまで適切であるかという問題はさておき、このような考え方は、人間のさまざまな知識(日常的な知識から理論や学問も含む)をメタ的に捉えることにも役立つ。つまり、ある知識があつたとき、それは個人的にであれ、間主観的にであれ、ひとが構成したものであるということに自覚的であり、そのプロセスまでメタ的に捉える態度があれば、それを絶対視することなく、他の異なるさまざまな知識を受け入れやすくなる。

ここで大切なのは、構成主義のこの見解が、客観主義的世界観に挑戦するものではあるが、かといって主観主義を推奨しているわけではないということである。主観主義は、たしかに知識の相対性を保証する思想であるという意味では、特定の知識を絶対視するという事態を回避できるが、同時にその相対性は、他の異なる知識に対して擁護するよりもむしろ排除するように作用しやすい。主観主義は、知識が各人において異なることを積極的に認めるが、それゆえに、特定の知識が他の異なる知識を評価したり、包摂したりするという事態については肯定できなくならざるをえない。このことは、主観主義をさらに押し進めた認知的独我論や瞬間的独我論を考えれば、よりいっそう明らかであろう。主観主義は、構成主義とは違い、さまざまな異なる知識の関係性をメタ的に論じることができない思想ではないのである。

### 二分法コードのメタ性

構成主義における発想のメタ性に引けを取らず重要なのが、構成主義の二分法コード (bi-

nary coding) のもつメタ的視点である。構成主義は、主観主義のように諸々の知識をメタ的に相対化するだけでなく、そのように考える認識主体までメタ的に捉えることができる視点を持ち合わせているが、その1つの鍵となるのが二分法コードである (Sugamura, 2003a)。

構成主義の基本的主題として、行為者は自らの経験を能動的に秩序づけることによって世界を組織化するという見方があるが、このとき重要な位置を占めるのがコントラスト (対照性) による秩序の生成である (菅村, 2003b)。脳神経系分野の研究成果や人間の知覚や思考に関する数多くの研究が示すように、われわれの意識は、その大部分において何らかの形での分類的なコントラストに基づいている (Mahoney, 1985)。「自己-非自己」、「図-地」といったコントラストがその代表である。変化という概念1つとっても、それは不変のものとの対照性において理解され、さらに「古い-新しい」、「既知-未知」といった対比のバランスの問題と関係し、このようなコントラストを通して意味秩序の生成が行なわれると考えられている。

科学的な研究成果に加え、このことは数理論理学的にも支持されている。これについての詳細は、von Glasersfeld (1995) や最近ではLuhmann (2002) が論じているが、その基本を理解するにあたって重要なのは、形式論理学の思考の法則である。すなわち、同一律や矛盾律、排中律を用いた思考の説明である。同一律は  $A = A$  であり、矛盾律は  $A \neq \text{非}A$  を表わしており、思考において、ある概念は同一の意味を保持しなければならず、それが変化してはならないことを意味する。排中律は、命題は真であるか真でないかの形式をとり、同時に両者にはなりえないことを示す。

構成主義にもいくつかの流派があるが (e.g., 河本, 2000; Lyddon, 1995; Mahoney, 1988; 菅村, 2000, 2003c)、とりわけ急進的構成主義 (radical constructivism) において、認識は暗黙のうちの「区別」という操作にはじまると

いわれる。これは基本的にAと非Aとの排中律であり、二分法を指す。ただ注意が必要なのは、それが構成主義の「土台」というわけではなく、ひとつのもつそのような思考傾向を積極的に認めるという意味で、ネットワークの一要素にすぎない。なお、このような位置づけの仕方は、とくに批判的構成主義 (critical constructivism) において顕著である。<sup>22</sup>

秩序は組織化され、変化するものであるが、変化は同一のものとの関係性においてのみ経験され、たえず区別を必要とする (菅村, 2002b)。たとえば、ひとにとって、もっとも原初的な区別が自己-非自己という二分法である (Guidano, 1991)。二分法コードは、A-非Aという形式において、論理的にあらゆる事象に適用可能であるために、複雑多様な人間の認識や思考のプロセスを考えるうえで非常に有用なわけであるが、二分法のもつこの側面こそメタ理論として示唆に富む点でもある。

二分法とは2つの区分肢が互いに排斥しあう論理区分を指すため、一般に有-無や真-偽などがその例として挙げられる。それを根拠に、排斥しあわない対概念には適用できないと主張する者もあるが、「Aである」とその否定形「Aでない」というコーディングを使う限り、あらゆる事象に適用できる。必ずしも対語を用いる必要はなく、有-非有でよいし、真-非真であってよい。後にも触れるが、これは一般にメタ理論の属性として求められる理論的拡張性を高めることにもつながる視点である。哲学としての構成主義が科学的な知見を支持し、またそれによって支持されるネットワークに参入できている背景には、構成主義のもつ二分法思考が分類学的な経験科学と実に相性がよいという事情もあろう。

### 自己言及性のメタ性

構成主義の二分法コードについて述べてきたが、ここでは人間科学への示唆を抽出することが目的であったため、そのメタ的視点にのみ焦



点を当てる説明をした。しかしながら、上述のような説明は、言い換えれば過度の単純化であって、重要な論点が抜け落ちたものとなっている。それは自己言及性の問題である。

二分法コードがどのようにして自己言及性の問題に行き着くかについては、手短かに説明できる問題ではないのでここでは論じないが、自己言及性とは、簡単な例では、「これは命題である」という命題も、命題が命題に言及しているという意味で、自己言及的な命題といえる。自己言及性の問題は、かの有名なEpimenidesのパラドックスにも見られるが、これが一般に議論されるようになったのは、Heisenbergが1927年に量子力学の基本原則として不確定性原理を提唱してからである（竹内、2002）。つまり、主客の分離が前提され、観測者が観測対象に影響を与えるという事態が想定されていなかった古典物理学に対して、不確定性原理は観測者が同時に観測対象に取り込まれるという自己言及的事態を浮き彫りにしたのである。

伝統的な学問では、このような問題は例外であり、矛盾であり、形式の乱れであって、排除されるべきものと考えられてきたが(von Glasersfeld, 1995)、構成主義では、その歴史を通じて、もっとも重要なテーマの1つであり続けてきた。構成主義にあっては、従来の学問がおこなってきたように、自己言及のパラドックスを「外側」から解こうとせず、パラドックスをパラドックスとしてその「内側」から再評価することに問題の解決口を見出す。Varela (1984) の言葉を借りれば、伝統的に悪循環として忌避されてきた循環論を、創造的な環である好循環として捉えなおすのである。

その自己言及性のパラドックスが実に巧妙に描かれているのが、多くの構成主義者が好んで引用するM. C. Escherの1948年の作品、“Drawing Hands”である (Figure 2)。この絵では、右手が左手を描き、左手が右手を描いている。右手が描かれなかったら左手は描かれず、左手が描かれなければ右手は描かれないは

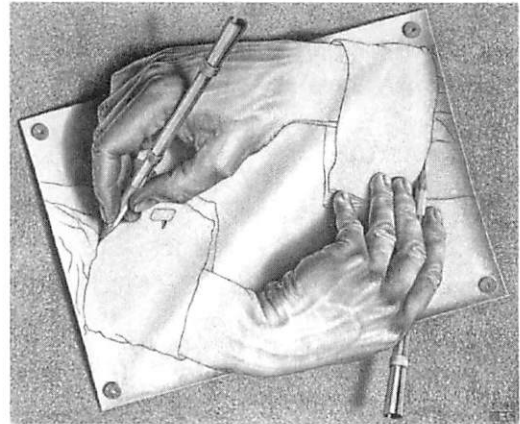


Figure 2 *Drawing Hands* (Escher, 1948)

ずであって、両手は相互に指し示し合い、結びつき、存在している。このようなパラドックスに対して、伝統的な学問がおこなってきたのは、それを論理の例外とするか、あるいは「第3の手」、つまり絵の「外側」にある「作者の手」を想定することであった。つまり、パラドックスの外側に飛び出し、パラドックスの形成の原因を外部に求めることで解決しようとしてきた。「描きあう両手」の一方を主観、他方を客観とくくならば、「第3の手」とは、たとえばHusserlの超越論的主観であり、社会的構築主義<sup>33</sup>における社会性であるといえるかもしれない。

ところが、構成主義では、パラドックスの外側には解決の糸口はなく、パラドックスのありようそのものが生きた世界であり、それを生じさせるシステムだと考える。最初にどちらかの一方の手が他方を存在させたのではなく、「存在を確定する膜と、存在の行動そのものであるメタボリズムが、いちどにできあがり、はじまる」のであって、「どちらが先でもない」のである(菅、1987、p. 315)。Maturana and Varela (1984) が主張するのは、生命のもつそのような基本的なループであり、存在と行動と認識とが、継ぎ目のない同時性のなかにあるということである。主客の問題に即していえば、はじめに主観ありきでも、客観ありきでもなく、それぞれが相互に言及し合い、同時に生きた世界を

存在せしめているといえる。

これを単なる主客の相補性という言葉では括ってはならないが、人間科学のメタ理論を再び考えたとき、このような自己言及的な事態、つまり主客の対立そのものをその内側から解消するような視点は、鋭く訴えるものがある。先に「第3の道」を模索する人間科学論を見たように、人間科学にあつては、伝統的な自然科学のように客観を基軸にするのではなく、その一方で主観だけに頼るわけにもいかない。かといって、ここで弁証法を持ち出しては、ふたたび「建築のメタファー」にあるような「知の垂直性図式」とでも呼びうる事態に遭遇する。菅村・春木(2001)の暗示する「超メタ理論」や西條(2002)の主張する「超認識論」なる枠組みも人間科学の1つのあり方であろうが、Hegel的な「知の垂直性図式」に囚われるかぎり、正および反の真理性が合に比して相対的に低下する事態は免れえない。

インターネットの比喩に見るように、諸理論の並列性によって人間科学を構成するとすれば、合と並んで、正と反もまたその連立制御ネットワークの重要な構成要素として見なされるべきであつて、そのような解決策として、対立の「外側」から、あるいは対立の上位に「第3の道」を模索するのではなく、構成主義のように対立の「内側」にとどまり、そこから理論構成するという試みももっとなされてよいと思われる。このような理論化が具体的にどのような形態をとるかについては、今日ではたとえばLuhmannの社会システム理論が好例であるが、ここでは構成主義、また人間科学の新たな理論化の可能性として、東洋思想からの示唆に着目し論を進める。

### 人間科学の行方

人間科学を考えるにあたって、また構成主義を考えるにあつても、東洋思想のもつ示唆は大きい。構成主義と東洋思想との関係については、たとえば、Varela, Thompson, & Rosch

(1991)やMahoney (in press)、また Sugamura (2003a) がすでに論じている。他方、東洋思想と人間科学については、春木(1997b)が複雑系科学を媒介にすぐれた論考をおこなっている。ここでは、人間科学と構成主義、そして東洋思想を議論すべく、まず構成主義に対する東洋思想の示唆を取り上げ、その後でふたたび東洋思想について構成主義の観点から再吟味し、人間科学の行方を考えることにしたい。

### 東洋思想からの示唆

東洋思想と一言でいっても、さまざまな思想が含まれるが、以下は主に道教と禅仏教を扱う。

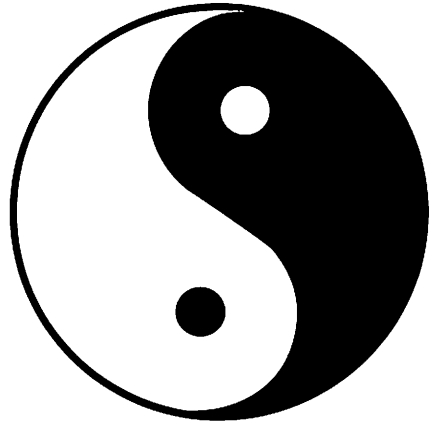


Figure 3 太極図

道教 先にM.C. Escherの「描き合う両手」を紹介したが、東洋的な見方をしたとき、すぐさま思い出されるのが「太極図」(Figure 3)である。これは「陰陽図」とも呼ばれるものであり、およそ紀元前500年前後に考え出されたとされる、あらゆる存在を陰気と陽気の対立の関係に捉える陰陽二気説が基になっている。これは、構成主義でいうところのAと非Aの二分法コードの基本発想に近い。

2つの図を比べてみると、たとえばEscherの絵における右手が陽で、左手が陰と見ることもできる。「描き合う両手」では、右手あつてこそその左手であり、左手あつてこそその右手であるという相互依存のパラドックスがあるが、太極図

においても、「陰があつてこそその陽であり陽があつてこそその陰だ」という関係において、両者は相互依存的存在である」（金谷、1977, p. 93）といわれる。東洋では、Escherはおろか、Vicoにも先駆けて2000年以上も前に、Aと非Aの二分法とその相補的な原理を見出していたとも受け取れる。

Escherの図には認められず、太極図に見られる大きな特徴は、陰中の陽、また陽中の陰である。太極図では、これが陰のなかの白点と陽のなかの黒点として明記されているが、「描き合う両手」にあつては、右手の中に左手がある、あるいは左手の中に右手があるというふうには描かれていない。陰中陽と陽中陰の論理は、対立物の相互転化の関係を明確化したものだといわれている（金谷、1977）。これはEscherの絵画からは必ずしも明示的でなく、また理論化も難しいものであるが、Vico(1710/1988)のいう「知識と製作行為との相互置換性」や「行為＝認識、認識＝行為」とするオートポイエーシス(Maturana & Varela, 1984)に接続可能な視点だと思われる。

両図に見られるもう1つの相違点は、太極図では陰と陽とが単純に並べて描かれている、つまり、ただ「そこにある」のに対して、「描き合う両手」では右手と左手が1枚の紙の上に描写されている点である。すなわち、Escherの図にあつては、右手と左手が紙を介してつながっており、両者は不可分の関係にあるが、太極図ではそれらの間を媒介するものはなく、その意味で分割可能性もまた暗示しているのである。

要するに、「描き合う両手」と太極図とは、Aと非Aの二分法、相互依存性と偶発的同時に共通主題とするが、太極図には一方の中に他方の要素が含まれることが明示的に示され、また相互分割可能性を暗に示している。つまり、太極図には、①相補的關係性（陰陽動的二元論）、②相互転化性（陰中陽・陽中陰）、③分割可能性（陰陽二氣説）という相矛盾するテーマが1つの図のなかに体现されているのである。

禅仏教 太極図のもつ上記のような示唆は、仏心宗とそこから派生した哲学のなかに、よりいっそう明確な形で見ることができる。太極図と禅を比べたとき、大きく異なるのは、前者は陰陽二氣説に表わされる二元論から出立したのに対し、禅は本来、二元論とはあまり馴染まない点である。禅は、言語文字を第二義として、それ以前に踏み入ることを第一義とし、対立の世界から飛び出すことを教える（鈴木、1964）。ただし、ここでいわれている「対立の世界から飛び出す」とは、Hegel弁証法的なプロセスではないだろう。なぜなら、禅では、「炭は黒い」という命題も真であれば、「炭は黒くない」という命題もまた真だとされるからである（Suzuki, 1934）。Hegel弁証法に照らし合わせれば、禅では、正、反の両方が真実とされると解釈できる。

禅は、勤は勤であつて勤でないという。これは論理的には  $(A = A) \wedge (A = \sim A)$  の事態であり、同一律と矛盾律に反する。だが、禅にあつては、『AはAである』といった命題の真意は、『Aは非Aである』ときはじめて理解される」ものであり、「それそのものであるとは、それそのものでない」ことを指す（Suzuki, 1934/1964, 増原訳、1991, p. 57）。禅は論理や分析のうえに展開されたシステムではないとSuzuki (1934) はいうが、しかし、このパラドックスこそ、構成主義が歴史を通じて追究してきたパラドックスでもある。Maturana and Varela (1998) が「行なうことは知ることであり、知ることを行なうことである」（p. 27）と説けば、禅経験は「知るものが働くもので、働くものが知るものである」（鈴木、1991, p. 25）と語る。禅が「 $A = \sim A$ 」という経験を突きつければ、Spencer=Brown (1972) は、 $f = \bar{f}$  とする。

先に、太極図がただ「そこにある」と述べたが、西田哲学では、存在は「そこ」という〈場所〉を根拠として見出される（湯浅、1977）。その〈場所〉は、Maturana and Varela (1984)

にとっては、自己言及性により生きた世界が生まれるところであり、西田幾多郎にとっては、「主体と環境とが何処までも相対立し、それは自己矛盾的に自己自身を形成し行くと考えられる世界 […]、即ち生命の世界」、「絶対矛盾的自己同一として動き行く世界」(西田、1989、p. 15) のことであろう。

### 構成主義の立場からの再検討

構成主義、また人間科学の新たな可能性を考えるべく、東洋思想からの示唆として、太極図と禅仏教を取り上げた。構成主義と東洋思想とは歴史的には全く系譜を異にするものであるが、少なくとも表面上の思想的類似性は大雑把に示された。もちろん、これは予備的な論考であり、試論どころか推論の域を出ないものであるが、これだけでも人間科学の将来を再考する道具立てにはならないことはない。

たとえば、太極図の含意する相補的關係性は、人間科学の諸分野における相互連携を単なる「寄せ集め」としてではなく、相互依存の關係として再構成する必要性を認識させる。相互依存とは、ここではネガティブな意味での「持ちつ持たれつ」の状態ではなく、オートポイエティックな円環性であり、互いが互いを形成し合うという積極的な意味を担う。

太極図の暗示する分割不可能性と分割可能性のテーマ、また仏心宗におけるA=非Aの超論理性は、構成主義と同様に、パラドックスを抱え続けることに1つの意義を見出すものである。これは人間科学のメタ理論を構成するにあたって、実に示唆に富む。つまり、従来の伝統的な学問がそうであったように、理論のなかからパラドックスを排斥しようとするのではなく、少なくともメタ理論のなかにはパラドックスを保持しつづけることを許容し、あるいは積極的にそうすることを推進するのである。

通常、理論には内的一貫性が求められる。個別の理論の場合、矛盾の存在はその理論の統一性を揺さぶることになるが、メタ理論として見

たとき、相矛盾する理論を内包することは、必ずしも内的一貫性を侵犯することにはつながらぬ。要は、矛盾を許容する理論を通じて、メタレベルで内的一貫させればよいだけである。それを可能にすると思われる有力な理論の1つは、進化論的認識論 (evolutionary epistemology) であり、もう1つはパーソナル・コンストラクト理論である。

**進化論的認識論** これは、知識とその進化に関するシステムについての研究であり、発端は18世紀まで遡るが、数十年前までほとんど議論されてこなかった分野である (Mahoney, 1991)。Campbell (1974) によると、進化論的認識論とは、人間存在が生物学的進化と社会的進化の産物であることを反映するものであり、変異の導入、一貫した選択プロセス、そして選択された変異の保持・増殖という観点で知識の進化を捉える。

人間科学のメタ理論にとって少なからぬ意義があると思われるのは、Bartley (1987) が述べるように、合理性というものが生存可能性という観点からは当てにならず、合理性によって理論が自らを正当化してはならないと主張する点である。また、かといって、長いあいだ生存できたとしても、それは自らを正当化することにはならないことは、生物の進化史や科学史を見れば一目瞭然であり、知識の進化過程では、正当化されない変異にはじまり、正当化されない生存に終わるのである (Bartley, 1987)。この理論はまた、長い時間軸のなかで、Aと非Aのそれぞれが姿を変えたり、Aと非Aという矛盾自体も変異したりする可能性を暗に示すものであり、人間科学に対して時間的にマクロスコピックな視点を与えてくれる。

**パーソナル・コンストラクト理論** これは Kelly (1955) の理論であり、進化認識論と共通する点もあるが、それが再燃する以前に提起されている。むしろここでは、この理論は進化論的認識論と相補的な關係にあると捉えたい。Kelly (1955) は、ひとは瞬間瞬間のさまざま

な出来事を独自の見方で捉え、同時にひとは長い人生のなかにおいて理解されるべきであるという人間観をもつ。この人生の理解の仕方が、パーソナル・コンストラクトと呼ばれる意味次元として扱われるものであり、これが人生において、機能上、積極的な役割を果たしていると考えられている（菅村、2003b、2003c）。一個人のなかで、多くの異なる意味次元が存在し、それが他者とのさまざまな関係性を形成し、そのひとがどのように振るまい、考え、そして感じるのかということにも直接関わっている（Epting, 1984）。

「パーソナル」という語からもわかるように、Kelly (1955) 自身は、もともと個人の知識について言及しているが、理論や学問もまた、多くの個人の知識から構成される広い意味での「知識」であり、メタ理論を検討する上でも、この概念は有用だと思われる。メタ理論を論ずるにあたって興味深いのは、このコンストラクトが固定的なものではなく、発達するにつれて情報を包括的に取り込み、偏りのない見方ができるようになるという点である。構成システムは発達すればするほど、権威主義的傾向や独断性、偏見が低くなり、他者視点の獲得や曖昧さへの耐性が高くなると言われている（鈴木佳苗、2002）。このようなシステムは、生存可能性が高いとされるが、だとすれば、メタ理論もまた偏った主義・主張のみをもっていたり、他の異なる理論の視点を獲得できなければ、その理論システムの生存可能性は低くなる。逆に、自ら権威主義的に陥ることなく、矛盾する視点を内包させることができれば、メタ理論としての生存可能性を高めることにつながる。

得てして、学問は、矛盾を排し、簡潔さ・明確さを求めるが（Patterson, 1973）、それゆえ異なる観点や矛盾を伴うことを嫌う。より正確に言えば、学問がそれを嫌うのではなく、個々の研究者が忌むのである。皮肉的にも、パーソナル・コンストラクト理論が示唆するのは、そのような研究者の構成システムは未発達であり、

生存可能性を低めるものであるということである。人間科学のメタ理論を構成するうえでは、個々の研究者のレベルで、曖昧さへの耐性をもつことが必要となるのかもしれない。

## さいごに

本稿は、人間科学についての一試論であり、とりわけ、メタ理論としての人間科学を論じることを企図した。もとより、人間科学なる概念については、種々多様な理論化・意味づけがなされるものであり、また大いになされてよいものでもある。構成主義の立場から人間科学を再考し、東洋思想との関連を示すというかたちで論じたが、ここでおこなったのは構成主義を「土台」とした人間科学を作ることではなく、構成主義的な知の並列ネットワークを人間科学と等置しようとする試みである。これは同時に、理論にまつわるさまざまなドクサを覆す試みでもあった。最後に、このような人間科学が、どのようなものであり、どこに向かうのかについて臆見を述べておく。

## 人間科学とはなにか

構成主義は、脳神経系科学の見地から、ひとは視覚的なイメージに依存しやすい生き物であることを強調する。「百聞は一見に如かず」であり、英語でも「見る」ことはわかることであり、判断することである。そのせいか、ひとは人間科学という概念についても可視化して理解しようし、「人間科学とはなにか」という問いに可視的な解答を与えようとする。これは、従来の人間科学論が、建築の隠喩をベースとし、人間科学の「土台」や「柱」が中心に論じられてきたこととも無関係ではないだろう。

代替的な理論システムの視覚的イメージを与えるために、インターネットの直喩を用いたが、これは建築の隠喩ほど可視化しにくい。また、進化論的認識論や構成システムの視座は、それ自体がダイナミックに発達するものであることを表わしており、ますます見えにくくなる。こ

ここで人間科学とは、このようなネットワーク全体であるともいえるが、しかしそれでは人間科学の営みを表わしたことにはならない。「人間科学とはなにか」という問いは、むしろ人間科学のアイデンティティを問うているのである。建築の隠喩に則った人間科学の場合は、この問いに対して、「土台」となる理論や「柱」となる研究領域を述べればいいわけだが、人間科学を連立制御ネットワークと見なせば、このような回答はできない。

それでも、「人間科学にアイデンティティはあるか」と聞かれれば、是と答えることができる。ただ、「アイデンティティ」という言葉の視覚的イメージにまかせて、これをひとのような統合体と見なしてはならない。「自己同一性」という文字に囚われることなく、これを捉えたとき、統合されない同一性としての自己という可能性も見えてくる。そもそも、構成主義が連立制御ネットワークを形成するのは、それが諸理論を「むすぶ」、また「つなぐ」理論であるからであり、人間科学のアイデンティティもそこに見出すことができる。

すなわち、人間科学はある場所にまとまって存在するのではなく、諸理論、諸学問の「間」に散在する。メタ理論でいう「メタ」とは、この意味において、「一段上位」の理論ではなく、「間」(meta-)の理論なのである。人間科学を固定化せず、また統合させるのでもなく、諸理論や諸学問をむすび、つなぐそのプロセスのなかに人間科学を見る。それは時間軸のなかでその都度生成され可視化されるのであって、これを安易に固定化したり、統合化したりしてはならない。

### 人間科学はどこに向かうのか

構成主義と東洋思想からの示唆として、矛盾の再評価を訴えてきた。進化論的認識論や構成システム概念によって、矛盾それ自体も包括的に抱え込むことがメタ理論としての生存可能性を高めることを示した。それは人間科学にとつ

て、Aと非Aの円環的關係性の導入であり、絶対矛盾的自己同一の追究でもある。このような観点から従来の人間科学論をふたたび眺めると、人間科学の向かうところ、向かうべきところが見えてくる。

たとえば、菅村・春木(2001)は、人間科学論の現在を振り返り、人間の全体性の復権をその共通テーマに挙げている。さて、ここで二分法コードを導入する。全体性をAとおけば、非Aは非全体性、すなわち部分性である。言うまでもなく、細分化された人間観を反省するために、人間科学の必要性が説かれたという背景があり、ここで部分性の重視を訴えることはアナクロニズムと取られかねないことは承知している。

しかしそれでも、従来の要素還元的なアプローチが、さまざまな分野で依然として有効であるという事実は、要素還元的な人間観もまた生存可能(viable)であることを示していると思われる。とすれば、人間科学は反動的に全体性のみをシュプレヒコールするだけでなく、部分性への認識も決して忘れてはならない。人間の全体性や複雑性を捉えるためのナラティブやカオス・アプローチ(Krippner, 2000; 西條、2002; 鈴木平、2002)についても、大いに議論されることが期待されるが、同時に、「人間は単純な存在である」という命題も熟考されなければならない。

人間科学の基本的態度として、Aが与えられたとき、常に非Aもまた視野に入れることが望まれる。両者は二者択一ではなく、互いに相補的な関係にあるが、それらの相互転化性もまた重要性をもつ。理論と理論との関係、またその理論を構成する個々の研究者レベルでも、「自己に於て絶対の他を見、絶対の他に於て自己を見る、絶対に独立しているもの相互の結びつき、非連続の連続」(西田、1932、p. 157)は探究の価値がある。全体性にあつて部分性を見、部分性にあつて全体性を見る。複雑でありながら単純であり、単純でありながら複雑であることを見るのである。

人間科学の方法論に照らし合わせていえば、質的アプローチが与えられれば、量的アプローチについても自覚的でなければならず、それらを相補的なものとして捉える。そして、ただそれらが相補的なものでなく、質のなかに量を見、量のなかに質を見ようとするのである。これは質と量の分割不可能性を意味するが、そこで区別自体を解消しようとしてはならない。太極図が、陰中陽・陽中陰のみならず、陰陽の分割可能性を暗示するように、質と量の二分法はその区別において無意味ではないのである。

このようにして、人間科学はいかなる一面的なテーゼも受け付けない。人間科学が、あるテーゼに振り向くとき、それはそのアンチテーゼにも同等に注目することになる。<sup>34</sup>人間科学の一般的通念として、人間の幸福を実現する科学という目標が掲げられることが多いが(徳永、1997)、本論文の流れにしたがえば、これが一面的なテーゼであり、これを受け入れるためには、人間の非幸福、すなわち不幸もまた見据えられなければならない。むしろ、幸福のテーゼは、人間の尊厳が犯される場合に、その対抗原理として掲げられるものであって(徳永、1997)、積極的に主張することはほとんど意味をなさない。たとえば墮胎の生命倫理に見られるように、誰の幸福を実現するかによって結果が変わってくるとすれば、学問としてはテーゼの意味すらなさない。価値理念としての生命倫理と環境倫理との相克はその典型例である。

このような意味において、特定の価値、たとえばそれが人間という価値(e.g., 菅村、2002a)であっても安易に主張することはできないとする徳永(1997)の人間科学論には首肯できる。彼がいみじくも指摘するように、人間科学だからといって「人間の科学」ではないのである。しかし、人間科学が「科学の人間化」(Strasser, 1962/1978)になるのかどうかについては、ここでは断定を控えたい。

本論の文脈に沿えば、特定の価値を含めることなく、「科学の人間化」と非「科学の人間化」

との絶対矛盾的自己同一を思索することに意義を見出せるかもしれない。あるいは、人間科学の「人間」という文字にも、「科学」という文字にも囚われないとき、その精神が掴めるかもしれない。人間科学は究極的には自らを二分化し、人間科学と非人間科学との関係について思索するのである。

#### 注1:

本来、“hierarchy”は「階層的な体制」を指し、“heterarchy”は「異なるもの同士の体制」を意味するものであり、通常は、それぞれ「縦列性」「並列性」と翻訳されることはない。しかし、階層性という概念には、一般にピラミッドに表わされるような何らかのかたちでの縦列性の含意があるものである。また、「異なるもの同士の体制」とは、別の箇所では、「連立的」や「脱中心的」という言葉に近い意味合いで用いられており、そこに縦列的な関係性は認められない。さらに、構成主義はコントラストによる知識の獲得を主張するものであり、原文でも“heterarchy”と“hierarchy”とは対比的なニュアンスが込められている。このような事情を考慮にいれ、本論文では、“hierarchy”を「縦列性」と訳し、“heterarchy”を「並列性」と訳出することにした。

#### 注2:

“radical constructivism”と対比される“critical constructivism”(Chapman, 2002; Mahoney, 1988, 1991)を菅村(2000)は「臨界的構成主義」と訳している。これは構成主義が急進的構成主義に「批判」をしているのではなく、行き過ぎない立場にとどめているというニュアンスである。だが、これは以下の理由から「批判的構成主義」と訳すほうが適切のように思われる。①この立場には、“critical rationalism”の影響もあるが、これは日本語では「批判的合理主義」と訳されることが多い。②進化

論的認識論の視座により、"critical constructivism"は自らが正当化されることを否定するという意味において、他者批判ではなく、自己批判をおこなっていると解釈できる。

注3：

菅村・春木(2001)は、構成主義と社会的構築主義をまとめてポストモダニズムとしているが、厳密には、構成主義はポストモダンの系譜とは異なる。たしかに、構成主義は、ポストモダンと呼ばれる動向と多くの共通点を持ち、実際にある種のポストモダニズムとして議論されることも少なくない。しかし、構成主義には、Ernst von Glasersfeld, Friedrich Hayek, George Kelly, Humberto Maturana, Jean Piaget, Esther Thelen, Francisco Varela, Paul Watzlawick といった、一般にポストモダンの文脈で語られることのない多くの研究者が重要な位置を占めている。なにより、構成主義の先駆者には、仏陀やHeraclitusのような紀元前の人物も含まれると考えられており、これをポストモダンと称するには、かなり無理がある。むしろ、構成主義は、特定の思想の「後」(post)にくる思想ではなく、時代の流れのなかでつねに「裏」と「表」を交錯してきた思想といった方が適切かもしれない。

注4：

これは、究極的な意味では、本論文の主題である並列性と縦列性との関係についてもいえることであり、並列性と縦列性との絶対矛盾的自己同一は探究の価値がある。しかし、本論では、その矛盾的同一性へと至る足がかりとして、並列化というプロセスが有用ではないかと考えている。

引用文献

浅井邦二・上田雅夫・大島康行・嵯峨座晴夫・相馬一郎・濱口晴彦・春木豊・野嶋栄一郎(1998) 座談会 I : 「人間科学部創設時をふり

かえる 一創設の経緯と理念」 人間科学研究, 11, 121-140.

- Bartley, W. W. (1987). Philosophy of biology versus philosophy of physics. In G. Radnizky & W. W. Bartley (Eds.), *Evolutionary epistemology, theory of rationality, and the sociology of knowledge* (pp. 7-45). LaSalle, Ill.: Open Court.
- Bridgman, P. W. (1955). *Reflections of a physicist*. New York: Philosophical Library.
- Campbell, D. T. (1974). Evolutionary epistemology. In P. A. Schilpp (Ed.), *The philosophy of Karl Popper* (vol. 14, I and II) (pp 413-463). LaSalle, Ill.: Open Court.
- Chapman, B. P. (2002). Psychology as a critical constructivist views it. *Constructivism in the Human Sciences*, 7, 159-172.
- Descartes, R. (1637). *Discours de la methode*. 谷川多佳子(訳)(1997) 方法序説 岩波書店.
- Epting, F. R. (1984). *Personal construct counseling and psychotherapy*. New York: John Wiley & Sons.
- Escher, M. C. (1948). *Drawing hands*. Retrieved October 15, 2002, from <http://www.mcescher.com>
- Feyerabend, P. K. (1975). *Against method: Outline of an anarchistic theory of knowledge*. London: New Left Books.
- Gergen, K. J. (1996). Beyond life narratives in the therapeutic encounter. In J. E. Birren, G. M. Kenyon, J. Ruth, J. J. F. Schroots, T. Svensson (Eds.), *Aging and biography* (pp. 205-223). New York: Springer Publishing Company.
- Giorgi, A. (1970). *Psychology as a human science: A phenomenologically based approach*. New York: Harper & Row,



- Publishers. 早坂泰次郎 (監訳) (1981) 現象学的心理学の系譜 勁草書房.
- Guidano, V. F. (1991). *The self in process*. New York: Guilford Press.
- 濱口晴彦 (1988) 人間科学的状況の人間科学化 ヒューマンサイエンス, 1, 77-85.
- 春木豊 (1988) 人間科学への態度 ヒューマンサイエンス, 1, 3-10.
- 春木豊 (1997a) 人間科学についての考察: 全体性と統合性を求めて 札幌学院大学人文学科紀要, 60, 13-26.
- 春木豊 (1997b) 東洋思想, 複雑性の科学, そして人間科学 ヒューマンサイエンス, 10, 10-12.
- 春木豊 (編著) (2002) 身体心理学: 姿勢・表情などからの心へのパラダイム 川島書店.
- 池田清彦 (1998) 構造主義科学論の冒険 講談社.
- Jantsch, E. (1981). *The self-organizing universe: Scientific and human implications of the emerging paradigm of evolution*. New York: Pergamon. 芹沢高志・内田美恵 (訳) (1986) 自己組織化する宇宙 工作舎.
- 金谷治 (1977) 中国哲学の再検討 現代思想, 5(1), 92-93.
- Kauffman, S. A. (1995). *At home in the universe: The search for laws of self-organization and complexity*. London: Oxford University Press. 米沢富美子 (監訳) (1999) 自己組織化と進化の論理: 宇宙を貫く複雑系の法則 日本経済新聞社.
- 河本英夫 (2000) オートポイエーシス2001: 日々新たに目覚めるために 新曜社.
- Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs: A theory of personality*. New York: Norton.
- Krippner, S. (2000). Research methodology in humanistic psychology in the light of postmodernity. In K. J. Schneider, J. F. T. Bugental, & J. F. Pearson (Eds.), *The handbook of humanistic psychology* (pp. 259-304). Thousand Oaks, CA: Sage
- Kuhn, T. S. (1996). *The structure of scientific revolutions* (3rd ed.). Chicago: University of Chicago Press.
- Luhmann, N. (2002). *Theories of distinction: Redescribing the descriptions of modernity* (W. J. O'Neil, E. Schreiber, K. Behnke, & W. Whobrey, Trans.). California: Stanford University Press.
- Lyddon, W. J. (1995). Forms and facets of constructivist psychology. In R. A. Neimeyer & M. J. Mahoney (Eds.), *Constructivism in psychotherapy* (pp. 69-92). Washington: American Psychological Association.
- Mahoney, M. J. (1985). Psychotherapy and human change processes. In M. J. Mahoney & A. Freeman (Eds.), *Cognition and psychotherapy* (pp. 3-48). New York: Plenum Press.
- Mahoney, M. J. (1988). Constructive metatheory: I. Basic features and historical foundations. *International Journal of Personal Construct Psychology*, 1, 1-35.
- Mahoney, M. J. (1991). *Human change processes: The scientific foundations of psychotherapy*. New York: Basic Books.
- Mahoney, M. J. (in press). *Constructive psychotherapy: A practical guide*. New York: Guilford Press.
- Mahoney, M. J., & Moes, A. J. (1997). Complexity and psychotherapy: Promising dialogues and practical issues. In F. Masterpasqua & P. A. Perna (Eds.), *The psychological meaning of chaos: Translating theory into practice* (pp. 177-198). Washington: American Psychological

- Association.
- Maturana, H., & Varela, F. (1984). *Der Baum der Erkenntnis*. Editorial Universitaria. 菅啓次郎 (訳) (1997) 知恵の樹 筑摩書房.
- Maturana, H., & Varela, F. (1998). *The tree of knowledge: The biological roots of human understanding* (Rev. ed.). Boston: Shambhala.
- Nicolis, G, & Prigogine, I. (1977). *Self-organization in nonequilibrium system: From dissipative structures to order through fluctuations*. New York: Wiley.
- 西田幾多郎 (1932) 実在の根底としての人格概念 上田閑照 (編) 西田幾多郎哲学講演集: 歴史的な身体と現実の世界 (pp. 114-168) 燈影舎.
- 西田幾多郎 (1989) 絶対矛盾的自己同一 上田閑照 (編) 西田幾多郎哲学論集III (pp. 7-84) 岩波書店.
- Patterson, C. H. (1973). *Theories of counseling and psychotherapy*. New York: Harper & Row, Publishers.
- Popper, K. (1963). *Conjectures and refutations*. New York: Basic Books.
- 西條剛央 (2002) 人間科学の再構築 I : 人間科学の危機 ヒューマンサイエンス リサーチ, 11, 175-194.
- 佐古順彦・竹中晃二・谷川章雄・根ヶ山光一・野呂影勇・村岡功・門前進・野嶋栄一郎 (1998) 座談会 II : 「人間科学のアイデンティティー—学際領域の知の共同体をめざして—」 人間科学研究, 11, 141-163.
- Spencer-Brown, G. (1972). *Laws of form*. New York: Julian.
- Strasser, S. (1962). *Phänomenologie und Erfahrungswissenschaft vom Menschen : Grundgedanken zu einen neuen Ideal der Wissenschaftlichkeit*. Walter de Gruyter. 徳永殉・加藤精司 (訳) (1978) 人間科学の理念 新旺社.
- 菅啓次郎 (1987) 訳者あとがき 菅啓次郎 (訳) (1997) 知恵の樹 (pp. 315-319) 筑摩書房.
- 菅村玄二 (2000) クライアント中心療法についての構成主義的見解 I : 現象学的アプローチと自己実現傾向の再考 人間性心理学研究, 18, 95-104.
- 菅村玄二 (2002a) 「人となり」を考える: "Personality" の人間科学 日本性格心理学会ニューズレター, 14, 6-7.
- 菅村玄二 (2002b) クライアント中心療法における変化のプロセスの再考: 構成主義の立場から 理論心理学研究, 4, 1-12.
- Sugamura, G. (2003a). A Buddhist Perspective on Constructivist Binary Coding. *Manuscript submitted at the 8th International Congress of Constructivism and Psychotherapy: Constructivism, phenomenology, and brain imaging*. Bari, Italy.
- 菅村玄二 (2003b) カウンセリングの条件の再考: 構成主義によるクライアント中心療法の再解釈を通して 心理学評論, 46 (印刷中).
- 菅村玄二 (2003c) 構成主義からみたクライアント中心療法: 構成主義4学派との比較を通して 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 (編) ロジャーズ: クライアント中心療法のすべて 日本評論社 (印刷中).
- 菅村玄二・春木豊 (2001) 人間科学のメタ理論 ヒューマンサイエンス リサーチ, 10, 287-299.
- Suzuki, D. T. (1964). *An introduction to Zen Buddhism*. New York: Grove Press. (Original work published 1934) 増原良彦 (訳) (1991) 禅仏教入門 春秋社.
- 鈴木大拙 (1964) はしがき 工藤澄子 (訳) (1987) 禅 筑摩書房.
- 鈴木大拙 (1991) 禅百題 春秋社.
- 鈴木佳苗 (2002) 対人認知の個人差研究とパーソナリティ 日本性格心理学会ニューズレ

ター, 14, 8.  
鈴木平 (2002) 身体心理学の将来: 人間科学としての複雑系と身体性の復権 春木豊(編著) 身体心理学 (pp. 295-311) 川島書店.  
太極図 Retrieved October 15, 2002, from [http://www.sgi.co.jp/users/otm/ki\\_nagareru/ki\\_nagareru\\_03\\_02.html](http://www.sgi.co.jp/users/otm/ki_nagareru/ki_nagareru_03_02.html)  
竹内昭 (2002) 〈自己言及性〉の哲学: 知の枠組み転換のために 粹出版社.  
徳永殉 (1978) あとがき 徳永殉・加藤精司 (訳) (1978) 人間科学の理念 新旺社.  
徳永殉 (1997) 人間科学とは何だろうか: ゆらぎの中での自己反省と自己組織化 大阪大学人間科学紀要別冊, 5-20.  
湯浅泰雄 (1977) 東洋思想への私の旅 現代思想, 5(1), 114-123.  
Varela, F. J. (1984). The creative circle: Sketches on the natural history of circularity. In P. Watzlawick (Ed.). *The invented reality: How do we know what we believe we know? (Contributions to constructivism)* (pp. 309-323). New York: Norton.  
Varela, F. J., Thompson, E., & Rosch, E. (1991). *The embodied mind: cognitive science and human experience*. Cambridge: MIT Press. 田中靖夫 (訳) (2001) 身体化された心: 仏教思想からのエナクティブ・アプローチ 工作舎.  
Vico, G. (1710). *De antiquissima Italorum sapientia ex linguae latinae originibus eruenda. Liber primus sive metaphysicus*. Napoli. 上村忠男 (訳) (1988) イタリア人の太古の知恵 法政大学出版局.  
von Glasersfeld, E. (1995). *Radical constructivism: A way of knowing and learning*. London: The Falmer Press.  
Weimer, W. B. (1977). A conceptual framework for cognitive psychology: Motor theories of mind. In R. Shaw & J. Brans-

ford (Eds.). *Perceiving, acting, and knowing* (pp. 267-311). Hillsdale, N. J.: Erlbaum.

#### 付記・謝辞

本論文の内容は、2002年10月19日に早稲田大学人間科学部キャンパスで開催された第3回次世代人間科学研究会において発表されたものである。研究会の幹事を務める西條剛央氏と清水武氏、また研究会当日に雑務を快く引き受け手伝っていただいたボランティアのみなさま、ならびに会場を大いに盛り上げていただいた参加者の方々にたいして、ここで感謝の意を表します。

その後、研究会メーリングリストにて、この発表内容に関して議論された富山大学の齋藤清二教授にもたいへん有意義なコメントをいただきました。また、本論文を構想するにあたり、セイブルック大学院・研究センターのスタンリー・クリプナー (Stanley Krippner) 教授から多大な励ましを受け、アメデオ・ジオルギ (Amedeo Giorgi) 教授から猛烈な反論を受けるという幸運にも恵まれました。なお、本論文の着想については、何度も議論をぶつけては、紳士的に木っ端微塵にいただいた、同研究センター、およびノーステキサス大学のマイケル・マホーニー (Michael Mahoney) 教授に感謝したく存じます。

最後に、部外者である私が本誌に投稿することを許可していただいた編集委員会の方々、またそれにあたりわざわざ推薦状を書いていただいた早稲田大学の春木豊教授 (現: Universidad de Flores, 名誉教授) に厚くお礼を申し上げます。

連絡先: sugamurag@hotmail.com

[2003年5月14日受理]

# Constructivism, Eastern Philosophies, and Human Sciences: From Hierarchical to Heterarchical Knowledge

Genji Sugamura\*

## Abstract

The author attempted to explore a new metatheory of human sciences, providing a consideration of the relationship between constructivism, Eastern philosophies, and human sciences. First, it was argued that the metaphors of construction are less solid and functional for a theory establishment, and instead, the Internet versions were adopted and human sciences as a "coalitional control network" were advanced. Second, constructivist ways of thinking, binary coding, and self-referentiality were reconsidered in terms of metatheoretical suggestions. Third, these concepts were reformulated from the viewpoints of Taoism and Zen Buddhism, and the reformulations were reexamined by the evolutionary epistemology and the personal constructs theory. Finally, the author discussed that human sciences find their dynamic identity in the linking and connecting processes, do not fall into a one-sided ideology, and it is worth pursuing the absolute contradictory self-identity between human sciences and non-human sciences.

**Key words** : metatheory, metaphor, binary coding, Yin-Yang figure, self-reference

---

\*Saybrook Graduate School & Research Center